

Title	マルシャル・ゲルーのマイモン論における時間と空間の解釈について
Author(s)	得能, 想平
Citation	共生学ジャーナル. 2019, 3, p. 76-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72885
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文

マルシャル・ゲルーのマイモン論における 時間と空間の解釈について

得能 想平*

On the Interpretation of Time and Space in Martial Gueroult's "Salomon Maimon's Transcendental Philosophy"

Sohei TOKUNO

論文要旨

実存主義、構造主義、ポスト構造主義によって知られるフランス現代思想は、当時の伝統的なカント主義の批判から出発した「アヴァンギャルド」として見なされることが多かった。しかし、テキストを注意深く読むならば、そこにはまさにそのようなカント主義との関連を示唆するものも少なくない。本稿は、このような背景のもとで、これまでほとんど忘れられていたマルシャル・ゲルーの『ザロモン・マイモンの超越論的哲学』における時間と空間の概念を取り上げなおすものである。この書物に見いだされる、無限悟性を前提とした時間と空間の考え方は、カント主義と現代思想のあいだにこれまで見過ごされていた連続性を見いだす機会を与えるものである。

キーワード マルシャル・ゲルー、ザロモン・マイモン、時間、空間

Abstract

Contemporary French philosophy, including existentialism, structuralism and post-structuralism, has often been regarded as "avant-garde" due to harsh criticism of traditional Kantism in the 1930s. However, upon reading the texts carefully, there are some signs that suggest its relevance. In this article, I propose to reconstruct the interpretation of the concept of time and space in relation to infinite intellect in "Salomon Maimon's Transcendental Philosophy" which has almost been forgotten. This attempt provides an opportunity to find the academicism at that time that prepared some aspects of the next philosophical movements.

Keywords: Martial Gueroult, Salomon Maimon, time, space

*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士後期課程 ; suv_396@hotmail.com

1. はじめに

およそ一九四〇年以降のフランスにおいて、実存主義、構造主義、ポスト構造主義と呼ばれる思想運動が矢継ぎ早に展開されたことはよく知られている。ある古典的研究によれば、これらの思想運動は、ヘーゲル哲学との関係によって特徴づけられ、以前の思想と区別される (Descombes 1979)。一九三〇年代のフランスのアカデミズムでは、カント主義的な哲学が大きな位置を占めていた。それに対して、実存主義者とされるサルトルやメルロ＝ポンティは、カント主義を乗り越えるものとしてのヘーゲル哲学の立場を肯定的に引き合いに出し、自身の立場を提示した。構造主義者の一人と見なされるラカンも、コジェーヴのヘーゲル講義をヒントにしながら、自身の精神分析的立場を確立した。さらに一九六〇年代以降に見られる、ポスト構造主義の代表者とされるデリダやドゥルーズも、いわゆる「一般的な反ヘーゲル主義」の陣営に属するものであるが、双方にヘーゲルからの影響を見いだすことができる。このような思想史観は、実存主義、構造主義、ポスト構造主義からなるフランス現代思想を、ヘーゲルによって古いアカデミズムとの断絶を成し遂げようとした「アヴァンギャルド」として描くものである。

本稿の試みは、このような「アヴァンギャルド」としてのフランス現代思想とアカデミズムのあいだには、忘れ去られてしまった連続性があるのではないか、という問いにかかわる。これもよく知られていることであるが、この思想運動の中核をなすヘーゲル解釈を準備したのは、コジェーヴに並んでソルボンヌ大学教授であったジャン・ヴァールやジャン・イポリットであった。さらに、メルロ＝ポンティやフーコーといった思想運動を代表する著者たちは、コレージュ・ド・フランスの教授としても活躍しており、この思想運動が「アヴァンギャルド」として大衆によって受けいれられただけでなく、当時のアカデミズムにも受けいれられていたことは間違いない。「アヴァンギャルド」として特徴づけられることで見落とされてしまう当時の哲学的な影響関係に関しては、多面的な仕方でも論じられる必要があるだろうが、本稿は、マルシャル・ゲルーの『ザロモン・マイモンの超越論的哲学』(1929)⁽¹⁾に注目することで、そのような影響関係の一端を示すものである。

マルシャル・ゲルー (1891-1976) は、二〇世紀フランスを代表する哲学史家の一人でありドイツ観念論や大陸合理論の研究で知られる。カントについての研究からキャリアを始め、フィヒテとマイモンの研究によって一九三〇年に博士号を取得したゲルーは、ストラスブール大学、ソルボンヌ大学の教授を歴任したのち、一九五一年からコレージュ・ド・フランスで教鞭をとった。以降、デカルト、マルブランシュ、スピノザについて大部の研究を次々に公にし、哲学史家として世界的に知られるようになる。以降のフランス思想に与えた影響によっても知られ、例えばドゥルーズが、非常に早いうちからゲルーの著作を読み、その影響のもとで哲学を行っていたことについては、よく知られている (Dosse 2007:122)。

ゲルーのマイモン論である『ザロモン・マイモンの超越論的哲学』は、博士論文の副論文として知られる。ザロモン・マイモン (1753-1800) は、『純粹理性批判』のコメンタリーである『超越論的哲学についての試論』などによってフィヒテに大きく評価された、カントとほぼ同時代のドイツで活躍した哲学者である。ゲルーは、『ザロモン・マイモンの超越論的哲学』のなかで、フランスの重厚な哲学史的蓄積を背景に、『超越論的哲学についての試論』を中心としつつも、マイモンのさまざまなテキストのあいだの整合性を吟味し、その思想を体系的に組み上げなおすことを目指した。本稿はとりわけ時間と空間の考え方に収斂する形で、彼のマイモン解釈を再構成し、フランス現代思想史における意義を論じたい。

本研究には三重の困難がある。一つは、ゲルーの『ザロモン・マイモンの超越論的哲学』には翻訳が存在せず、ドゥルーズとの関わりで参照されることはあっても、その議論の内実がほとんど知られることがなかったという点であり、次に、ザロモン・マイモン自身の哲学的立場がそれほど一般的に知られているとは言い難い点であり、最後に、その中で示される時間と空間の考え方そのものが、カント哲学とライプニッツ哲学に関する前提知識なしには理解しがたいという点である。われわれはまずゲルーのこの著作の紹介を兼ねて、「序論と第一章」(7-57) の議論の再構成を行い、ゲルーがマイモンのうちに読み込む議論の大枠として「現象」と「無限悟性」の関係を確認する。そのあとで、われわれは「規定可能性」、「無限悟性」、「微分」といった概念との関係において、ゲルーがマイモンのうちに見いだす非カント的な時間と空間の考え方を取り出す。そして最後に、ここで見いだされた

時間と空間の考え方が、いかなる点で「アヴァンギャルド」としての現代思想とアカデミズムを架橋するものであるかを論じる。

2. 前提となる考え方

以下では、ゲルーが取り上げるマイモンの非カント的な時間と空間の考え方を参照するために必要な前提を確認するために、この本の「序論」と「第一章」を、議論の展開を追う形でやや詳しくに再構成する。ゲルーの記述の特徴として、当時の専門家の読者を想定して、詳細な区別を説明することなしに用いて議論を進めていくという点が挙げられる。再構成にあたっては、議論に役立つ限りにおいて用語の区別を行い、必要と思われる説明に関しては、マイモンの他の章の記述を参考にしながら補ったところもある。重要であると思われるが、次節の議論との関わりや議論の展開の大枠との関係上触れられていない論点もある。ご了解いただきたい。

序論：マイモン哲学の精神

マイモンが活躍した時期の状況は次のようなものである。出版された著作としては、カント哲学をその隠された原理から再構築しようと試みるラインホルトの『人間の表象能力についての新理論の試み』（1789）や、スピノザ哲学の再解釈のきっかけを与えるヤコービの『スピノザの学説に関するモーゼス・メンデルスゾーン氏宛書簡』（1785）、さらに同じくヤコービの、その付録のなかで物自体の概念の矛盾する特徴を明らかにしたことで知られる『デイヴィッド・ヒュームの信について』（1787）などが挙げられる。ライプニッツの『人間知性新論』の独訳（1780）や、ヒュームの『人間本性論』の独訳（1790）など原典の翻訳などが出版されたこともあり、当時のドイツ哲学は、カント主義、ヒューム主義、スピノザーライプニッツ主義という「三つの主要な傾向の衝突」によって特徴づけられる（8）。

マイモンの『超越論的哲学についての試論』は、カントの『純粹理性批判』を、懐疑論者（ヒューム主義）の攻撃から守るための著作である。カントの『純粹理性批判』は、懐疑論の論駁にまで至っておらず、認識の異なる諸要

素のあいだにより繊細なつながりを打ち立てることが不可欠であるとマイモンは考えていた。マイモンのカント哲学の再構築の試みは、隠された第一原理を発見することで「上から下へ」進むラインホルトのものとは異なり、「当時の諸科学との絶え間ない接触」によって「下から上へ」なされるものであった(9)。マイモンの探求が目指すものは、哲学の出発点としての形而上学的真理でも、哲学が到達することになる帰結でもない。そうではなく、科学的形式をもっとも合理的な仕方の説明する「フィクション」としての「内在的で体系的な一性」である(13)。このような観点から、マイモンの哲学はカント哲学を土台としながらもスピノーザーライプニッツ主義へと接近していくことになる。

第一章：アプリアリな総合判断の問題

§ 1 「批判」のコペルニクスの虚構

マイモン哲学が目指す「内在的で体系的な一性」とはどのようなものだろうか。カントは自身の作品をコペルニクスの体系と比較した。われわれはこの類比を深めることで、カントがいかなる点において不足していたのか、そしてマイモンが目指す一性とはどのようなものなのかを知ることができる。

天文学者にとって、事実として与えられているのは「諸天体の運動」である(17)。この運動はわれわれの地球から見える運動でしかないという意味で「相対運動」である。この「相対運動」から、一方でプトレマイオスは太陽が地球の周りをまわっていると考え、他方でコペルニクスは地球が太陽の周りをまわっていると考えた。

マイモンは、「絶対運動」のとらえ方が二人の違いを生んだと考える。彼は「絶対運動」の可能な四つの意味を挙げるなかで、コペルニクスの理論的転回が可能にした二つの条件を明らかにする。その条件とは、第一に、絶対運動は、空間全体に対するそれ自身相対的な運動によって表現されなければならないというものであり、第二に、絶対運動は、重力の普遍法則を満たすものでなければならないというものである(16-17)。この二つを同時に満たす仕方、諸天体の運動が解釈されることでこそ、より「体系的な天文学」が可能になるのである。

カントが、自身の超越論的哲学への転回を、このコペルニクスの天文学の転回になぞらえていたことはよく知られている。ただし、この類比で考えるならばカント哲学はその転回の途上においてしかないというのがマイモンの見立てである。諸天体の相対運動に代わってわれわれに与えられるのは、「現象」である(17)。絶対運動の二つの条件とされた、空間全体を前提としたうえでの相対的なものとして表現されることと普遍法則を満たすことは、それぞれ直観の形式としての時間と空間、悟性の形式としてのカテゴリーに対応する。『純粹理性批判』におけるカント自身の議論は、現象が時間と空間から切り離せないこと、そしてその時間と空間がカテゴリーから切り離せないことをそれぞれ示すものであるが、このとき、現象は、その質料からくる偶然的な特徴を説明するために、われわれの外にある認識不可能な無条件的なもの、つまり「物自体」を必要としてしまう(18-19)。そのため、相対的なものとして表現されることの絶対運動としての「物自体」が想定される点でカントの立場は、マイモンにとって、コペルニクスの転回の第一の条件を満たしていないように映るのである。

マイモンは、悟性の普遍法則と同時に、時間と空間に規定された仕方で、現象の根拠が考えられねばならなかったと考える(20)。絶対運動としての「物自体」ないし現象の根拠が、普遍法則を満たすものであると同時に、時間と空間のうちに現れること、これが「内在的で体系的な一性」を目指すマイモンの哲学の条件である。マイモンが以降で独自の仕方で定立する「規定可能性の原理」や意識の「諸微分」は、根拠が意識に内在的なものとして考えられるために不可欠なものである。

§ 2 アプリオリな総合判断に相対的な事実問題と権利問題の問い。カントの解答の不十分さ。

以降のゲルーの論述は大きく二つの段階に分けて考えることができる。まず、「現象」の構造がどうあるべきかを、マイモンのカントとライプニッツに対する批判から考察するという段階、次に「普遍法則」を満たす「物自体」ないし現象の根拠が現象において現れるとはどのようなことかを吟味する段階である。以下では、主に前者を扱う議論を再構成することになる。

これまで、現象と呼んできたものは、そこにおいて数学的判断と物理学的判断、つまりアプリオリな総合判断が成り立つことを前提とするものであ

る。これら二つの判断についてのカントの議論を批判することが「内在的で体系な一性」を扱うマイモンの哲学の重要な要素をなしている。

われわれは、数学的判断と物理学的判断を確実なものを見なして生活している。ただ、その一方で数学的判断と物理学的判断が本当に確実であるかを疑うこともできる。数学的判断ないし物理学的判断が本当に事実であるか、この問題こそがカントによって「事実問題」として取り上げられたものである。

カントにおいては、事実問題は概念が「実現」されることで解決される。「二点間の最短の線である」という特徴をもつ直線の概念は、実際に作図されることで実現され、その事実性が確かめられる。同様に、「熱さが空気を膨張させる」といった判断も、実現された、熱する前の空気の体積と熱した後の空気の体積の比較によって、その事実性が確かめられる (22)。

ところで、この「実現」は、明らかに「アприオリな概念」の秩序を前提としている。われわれは、実現によって直線が最短の線であることを知るのだが、その経験が直線を最短にしたわけではない (23)。われわれは実現によって諸概念の可能性を確認するのであって、その可能性を創造するのではない (22)。これらのことから、実現は「不可分な諸単位」として同一的に存続する「アприオリな概念」の秩序を前提とできると考えることができる (24)。

こうなると、事実問題が解決された一方で、「アприオリな概念」の秩序と「実現」の関係が思考可能であるのかという別の問題が生まれることになる。カントによって、「権利問題」として取り上げられるのはこれである。

マイモンは、権利問題の解決を失敗しているという点でカントを批判する。カントの解決の仕方は、数学的判断にしても物理学的判断にしても結局のところ同種であり、アприオリな概念が、アприオリな直観の形式を通して、質料に適用されることによっている (26)。ところで、このような解決には諸概念の可能性の理由を知ることができないという不備がある。例えば、われわれは作図によって、「直線である」という概念と「最短である」という概念が同時に実現されることを知るのであるが、「どのようにしてこれら二つの項が同時に同じ主語(線)に帰属させられうるのか」を知ることができない (27)。つまり、「直線が最短である」ということの理由を悟性によって知ることができないのである。カントの解決は、悟性によって理解で

きない仕方で概念を秩序づける「物自体」を要請するものであり、思考不可能なものを前提とする点で、権利問題を解決しているとは言えないものである。同様の不備は、物理学的判断に関しても見いだされる (27)。

権利問題の未解決は、事実問題の解決に対しても影響を与える。確かに、作図された直線は最短である。しかし、直線がなぜ最短であるかについて、われわれは悟性を用いて理解することができない。もしそうであれば、事実問題として確かめた数学的判断の必然性は、単なる「主観的必然性」に過ぎないこともありうるのであり、根拠に対する疑いへと導かれることとなる (27)。数学的判断はわれわれにとって役に立つから現状のものとなっており、実際にそうでないものでもありうる。このようなプラグマティックな数学観はまさに懐疑論的な数学観であり、カントの解決はヒューム主義に陥ってしまう (29)。

§ 3 ライプニッツの解答の素描

カント的な仕方で、アприオリな総合判断が根拠づけられないからといって、思考可能で確実な判断が存在しないとは限らない。ライプニッツは、総合判断と見なされていたものを分析判断に還元することで (30)、とりわけ数学的判断をカントとは別の仕方で考えていた。マイモンは、このライプニッツ的な数学の解釈についても検討を加えている。

直線の例をもう一度取り上げよう。カントの立場においては、共存する「直線であること」と「最短であること」の関係が理解されないことが問題であった。ところで、このことは実現以前においては最短でない直線も思考可能であるということを示唆している。というのも、作図の次元を考慮に入れなければ、「直線であること」と「最短でないこと」という二つの概念のあいだには、いかなる矛盾も見いだせないからだ。

ライプニッツは、数学的判断に関するこのような事情を次のように理解する。「直線であること」と「最短でないこと」のあいだには、実は矛盾が存在するのであるが、いまだ十分な仕方で「直線であること」が理解されていないために、その矛盾を見いだせていないだけなのではないかという理解である (31)。ライプニッツの考え方は、アприオリな総合判断を、われわれの悟性の有限性に基づいた見かけ上のものと見なすことで、あくまでも実現される概念の次元のみを議論の対象とするものである。

マイモンは、実際にライプニッツ的な仕方での直線の解釈を検討している。マイモンは、ヴォルフの定式を参照しながら、「最短である」という概念から切り離して、作図された直線を「すべての部分が同じ方向をもつ」ものとして定義する。このとき、この定義に関わる概念の秩序から、非直線としての曲線が「すべての部分が同じ方向を持つわけではない線」であること、言い換えると「複数の直線からなる線」であることが帰結される。ところで、二点を結ぶ線の長さに関しては、曲線よりも直線の方が短いことが、ユークリッド幾何学の定理から証明される⁽²⁾。したがって、「すべての部分が同じ方向を持つ線」は「最短である」ので、定義から直線は必然的に最短のものになる。このことは逆も成り立つのであり、「直線であること」と「最短であること」は互いに分析的である (31-32)。

ただし、実際に作図された直線とその定義としての「すべて部分が同じ方向を持つこと」のあいだには非対称性が見いだされる。一方で「直線であること」、すなわち「まっすぐであること」は、感性的に曖昧な仕方と与えられる「位置 (situation)」に関わるものであり、定義としての「すべての部分が同じ方向をもつ」という概念を前提としている。他方で、「すべての部分が同じ方向をもつ」という概念は、その概念の秩序において、その否定としての曲線の概念や、線に関するユークリッド幾何学の秩序と切り離せない仕方と共存している。ライプニッツ的な考え方は、このような意識に内的な仕方と存在する概念の秩序が、発生的な根拠としてはたらしき、すべての直観の対象を生産していると思なすものである (32-33)。このとき、われわれが作図された直線において、概念には還元されない何かを感じているとすれば、それはわれわれの悟性が有限であるために、実在している概念の一部しか理解できていないことによっているのである (35)。

このことから、ライプニッツ的な数学の考え方もマイモンを満足させない。このような数学の考え方は明らかに、そこから関係のすべての様態が生産されるような、概念と実在性が一致した「無限悟性」を想定している (34, 36)。ところで、無限悟性は数学的判断に関して以下のような困難を持つ。もし数学が直観においてではなく無限悟性によって根拠づけられるなら、われわれの有限性ゆえにそのようなものを思考することはできず数学的判断に根拠を与えることができない。そのため、思考不可能なものを想定しているという点において、カントの結論と同様に数学的判断についてのヒュ

ーム主義に陥ってしまう (38)。マイモンは、この帰結を受けて、カントとライプニッツを総合する自身の立場を模索することになる。

§ 4 独断論的でもなくカント的でもない超越論的な中間の解答の探求

マイモンの立場は、ライプニッツ主義にカント的な内実を付け加えることで数学的判断を根拠づけようとするものである (38)。実際のところ、ライプニッツにせよカントにせよ、数学的判断は空間において問題になっている。しかし、ライプニッツはその空間を、人間の無限悟性についての不完全な認識からくるものと見なすことで、数学的判断の根拠を超越的な悟性のうちに見いだしてしまう。それに対してカントは、認識する主体に空間を関係づけることで、悟性に還元されない感性に数学の根拠を置くことになる。ただし、そのときに感性を異質なものとする「物自体」を定立するのであれば、権利問題は解決されないのであった。マイモンの立場は、われわれの経験的対象とは独立した、別種の対象を感性のうちに見いだし、それを用いて数学的判断が行われる空間を根拠づけようとするものである (39)。感性のうち、経験的対象とは別種の実在性として与えられるもの、これが、後に見ることになるが、「微分」と呼ばれるものである。

以降のセクションにおいて、マイモンの立場は次のような仕方で明らかにされる。第一に、マイモンが「規定可能性の原理」を用いて数学的判断を定式化しなすことを確認する。第二に、「規定可能性の原理」によって定式化される数学的判断は、物理学的判断に関わる次元を前提としていることを示す。第三に、規定可能性の原理と物理学的判断を同時に根拠づける「無限悟性」ないし「微分」の考え方が問題になる。あらかじめ述べておくならば、マイモンの時間と空間についての考え方は、数学的判断と物理学的判断についての「規定可能性」の原理と「微分」の考え方を一般化したものとなるだろう。

§ 5 矛盾律と相互規定の排除

数学が根拠づけられることになる空間を、さらに別の仕方で根拠づけるためには、いわゆる一般論理学で問題にされる矛盾律や相互規定の原理 (同一性と差異、実在性と否定、原因と結果などの関係の概念) は、役に立たない。例えば、作図された「黒い線」に対して、矛盾律や相互規定の原理は、

「線」の概念を根拠づけるためには役に立つかもしれないが、「黒い」ことと「直線であること」の偶然的なつながりを根拠づけるためには役に立たない(40)。感性においては、概念がみずからを実現させることで一性を与える「線」のような対象の次元と、その線に偶然的な特徴として現れる「黒さ」の次元の区別があること、このことが以降の議論において重要になる。

§ 6 規定可能性の原理

マイモンによれば数学的判断は、「一方向的な規定」である。例えば、「二等辺であること」なしの三角形は実在するが、「三角形であること」なしの「二等辺」は存在しない。このとき実現された概念としての「三角形」は「規定可能なもの」と呼ばれ、概念が実現されることで、その必然的な結びつきが見いだされる質料的特徴としての「二等辺であること」は「規定」と呼ばれる。「規定可能なものなしに、規定は存在せず、その逆は正しくない」、これが規定可能性の原理である(41)。この原理は五つの特徴を持つ(42-43)。

1：複数の規定可能なものに共通の規定は存在しない。2：同じ規定可能なものは同時に唯一の規定しかもつことができない。3：ただし、規定可能なものは従属関係にある諸規定であれば複数を持つことができる(例えば図形という規定可能なものは、三角形という規定と、三角形に従属する二等辺という規定を持つことができる)。4：規定可能なものは、規定よりも実在性をもつ。5：規定可能なものは主語、規定は述語と呼ばれる。規定可能性の原理の役割とは、数学的判断を、規定の側からは分析的、規定可能なものの側からは総合的にすることである(50)。作図された「三角形」が持つ「二等辺である」という特徴から見れば、数学的判断はライプニッツの言うような分析的な確実性を持ち、他方で、可能的対象として質料から切り離して考えられた「三角形」の概念から見れば、「三角形が二等辺であること」は総合判断であり、「二等辺であること」は「三角形」の概念からどう努力しても導出されないものである。このような、内容を捨棄された形式的な概念に対する、経験的对象としての実在的な概念の優位は、マイモンの哲学を特徴づけることになる。

§ 7 規定可能性の原理の諸帰結

これまであまり触れてこなかった物理学的判断に関しても確認しておこう。数学的判断は、経験的对象としての「三角形」と、作図によって得られる偶然かつ質料的な「二等辺」という二つの項のアプリオリな総合であった。それに対して、物理学的判断は「火が熱さの原因である」といったものであり、対象の部分をなす質料的な特徴の項同士の判断である。ヒュームが指摘したように、知覚において、火と熱さのあいだの必然的関係を見いだすことはできない。物理学的判断とは、それによってかろうじて偶然かつ質料的な特徴のあいだに秩序を見いだす自身の他に根拠を持たない判断であり、習慣によって必然的になった「想像力の総合」である (45,47)。

このような物理学的判断の根拠づけには、数学的判断の際に用いた直観の形式としての空間と時間を用いることはできない。というのも、直観の形式は、空間的ないし時間的な仕方ですべての直観が互いに関係していなければならないことを要請するが、その内実としての、具体的な「これ」と「それ」がアプリオリに関係づけられることを説明する力を持たないからである (45)。カントは、直観の形式から統制的原理としての仮説的判断を演繹することで、物理学的判断に普遍性を与えたが、マイモンはこのような権利問題の解決を不十分なものとして認めないのである (46)。

§ 8 数学的な規定可能性の原理の不十分性、差異の原理

規定可能性の原理は、物理学的判断の次元も考慮にいれるのであれば、不十分なものとなる。というのも、規定可能性の原理は想像力の総合の次元をすでに含みこんでいるからである。作図された「黒い二等辺三角形」があったと考えてみよう。もし、この総合の一方の項が他方の項と切り離しえない場合（「二等辺であること」は「三角形」から切り離しえない）、そのとき、規定可能性の原理から、その三角形が二等辺であることは分析的に帰結することになる。他方で、この総合の一方の項が他方の項と容易に切り離すことができる場合（「三角形であること」は「黒いこと」から容易に切り離すことができる）、この場合、この二項は、単なる時間と空間における「共存」によって結び付けられることになり、物理学的判断の可能性をもつものとなる。要は、規定可能性の原理とは、物理学的判断の次元から数学的判断に役に立つ諸特徴を選別する「決定機関 (instance)」なのである (48)。この意味で、規定可能性の原理は、数学的に新しい帰結を生む諸規定をそこから選

び出す「想像力の総合」を前提としているのである (51)。そのため数学的
判断を空間において根拠づけるのであれば、さらに空間のうちに存在する
偶然的な諸特徴の秩序づけについても説明する必要がある。

規定可能性の原理は、時間と空間のうちにある現象の一部分だけを、ア
プリオリな概念が支配する「同一性」の秩序へと移行させることを意味する
(50)。そしてこの同一性の秩序に回収されない部分は、物理学の対象とな
る偶然の領域として残されている。マイモンは、すべての規定が必然的に規
定可能なものを持つことを認めており、偶然的な諸規定は、すべてがおのお
のに規定可能なもの、つまりはその本質としての概念を持つ。しかし、この
ことは同時に、物理学的判断しか成り立たない偶然性の領域が、本質の諸部
分として存在していることを示す (51)。要は、直観の形式において現れる
一性のどれもが、それぞれの仕方でも偶然性の領域を表現するのである。

§ 9 差異の原理と無限悟性の概念

「現象」は「同一性と差異の起源的結合」という構造をとらねばならない、
われわれはこれまでのゲルーの議論をこのようにまとめることができるだ
ろう (54)。「現象」とは、そこにおいて少なくとも数学ないし物理学の基礎
的な条件として、「概念の実現」や「因果関係」が成り立たねばならないも
のである。とりわけ前者が満足に成り立つためには、「規定可能性の原理」
を認めねばならない。このとき「現象」は、「概念の実現」としての「規定
可能なもの」ないし対象 (同一性) と、その部分的かつ質料的特徴として「諸
規定」(差異) の結合という構造をとらねばならない。

しかし、ここには普遍法則を満たす「物自体」ないし現象の根拠に関する
議論がいまだ欠けている。§ 1 で見たように、超越論的哲学においてカント
の試みを貫徹するためには、時間と空間のうちにある「現象」をそれだけで
考えるのではなく、普遍法則を満たす「物自体」ないし現象の根拠との関係
において考えねばならない。

このような「物自体」ないし現象の根拠としてとらえられるものこそ、「無
限悟性」である (55)。「無限悟性」は、大まかにいって現象との関係に関す
る二つの問いに答える必要がある。一つは、「規定可能性の原理」が前提と
する「同一性と差異の起源的結合」の秩序が無限悟性との関係においていか
にとらえられるかであり、もう一つはそこにおいて物理学的判断が成り立

つ「差異」の秩序が無限悟性との関係においていかにとらえられるかである。「無限悟性」が一方で、われわれにとって有限な仕方では存在するアприオリな概念の実現の秩序を生産し、他方で、直観においては「差異」を与え、数学的判断と物理学的判断を同時に根拠づけている。マイモンの超越論哲学の核をなすこのような「崇高な理念」は、さまざまなものに権利問題の解決を与えることになるだろう (56)。この意味で、微分は懐疑論の根拠ではなく、懐疑論を破壊するための概念である (64)。

3. 能動性としての時間と空間

われわれはこれまでのところで、「序論と第一章」の議論を再構成することで、ゲルーがマイモンのうちに読み込む議論の大枠を「現象」とその根拠としての「無限悟性」との関係として確認してきた。このようなゲルーのマイモン解釈は、さまざまな論点を有機的に結びつける体系的な解釈として特徴づけることができるだろう。ゲルーのマイモン理解はおおのこの論点に関して見れば、現代のマイモン研究による理解と大きく異なるわけではない⁽³⁾。しかし、ゲルーは、マイモンの個々の論点について正否については拘らず、むしろカントの数学と物理学のとらえ方に対するマイモンの批判が、「規定可能性の原理」と結びつき、それらを根拠づけるものとして無限悟性を要請するといったように、それぞれの議論のあいだにマイモン自身によっては直接的に示されていない論点のつながりを見だし、マイモン哲学に一貫性を与えようとする点に特徴がある。このため、「現象」と「無限悟性」の関係の大枠として、他の論点はこの関係に結びつけられるかたちで論じられることになる。

本節では、前節までの確認を踏まえたうえで、「現象」と「無限悟性」との関係において論じられるゲルーのマイモン論における時間と空間の考え方を確認する。われわれは、この時間と空間の理解を、大まかにカント的な時間と空間の理解からの逸脱として特徴づけることができる。カントにおける時間と空間とは、「現象」がそれを通して与えられる枠組みとしての直観の形式であり、主観がその外部に対して押し付けたものである。しかし、ゲルーがマイモンのうちに見いだす時間と空間は、「無限悟性」と「現象」

の関係において検討されることで、主観の側ではなく、その外部の側、つまり「無限悟性」の側へとその根拠を移し、「能動性」を持った「現象」そのものになる。われわれは以下でこのことを確認する。

まず、無限悟性から物質の発生の考え方に関して簡単にまとめておこう。「無限悟性」はすべての諸事物を生産する「叡智的關係の総体」つまり普遍法則の束として考えられる (60-61)。この叡智的關係は「 x は y の関数、 y は z の関数などなど」といった仕方で、規定されている。このとき、この相互規定を用いた推論を考えてみよう。先の前提から、 x と z のあいだにも関数関係にあると言える。要は、与えられた諸関数から合成関数の作成と並行的な形式のもとで実在的な「諸事物の特異性」の発生が考えられているのである (77)。「無限悟性」からの合成関数的な発生によって、すべての時間に先立つ「諸事物の特異性」の可能性は示されたものの、他方で、この特異的な諸事物の人間による認識も説明されねば、権利問題が解決されたとはいえない (87)。「現象」は、「物自体」ないし現象の根拠としての特異的な諸事物の認識として説明され、さらに数学的判断と物理学的判断の可能性と同時に含んでいるものでなければならない。

このようなことを可能にするのは、「微分」という考え方である。「微分」とは、「無限悟性」と「現象」の関係を説明するものであり、その内実は数学的な意味での「微分」と類比的に捉えられている。

第一に、無限悟性が生産する「特異的な諸事物」は、想像力によって「微分」として受容される。普遍法則の束として捉えられる無限悟性は、その関数の関数として実在的な諸事物を生産する。これが無限悟性によって生産された諸事物そのものであった。ところで、微分とは感性においてこの生産のあり方を表象するものである (60)。言うまでもなく、われわれは、無限悟性によって創造されたままの「特異的な諸事物」を直観することはできない。しかし、われわれの感性は、直観の対象には還元されない仕方で、無理数のような「極限の理念」として、この「特異的な諸事物」を「意識の諸微分」を集め、われわれの想像力に帰属させる。これはつまりそれ自身全くながりのない何らかのもの集合が、意識されることなしに与えられていることを意味する。この意識の諸微分は、われわれの時間と空間の発生の母体となるという意味で「発生的」と呼ばれるし、意識の最高類としての「能

動性」に帰属される対象であるから「類的 (générique)」であるとも呼ばれる (60,74)。

「微分」は、われわれに対して「関係」ないし「規則」としてのみ認識される。例えば、三つの辺に囲まれているものは三角形である。このとき、この「三つの辺に囲まれている」という三角形の概念の規則こそが、唯一われわれに認識される「諸微分の関係」つまり「 dy/dx 」である (61-62)。それに対して、規則に含まれる「三つの辺」はそれぞれ一つずつ考察されたとしても意味を持たないものである。この「微分」によって生産された「三角形」の概念は、それ自身「大きさ」を持たず「未規定な」ものである。われわれはこのようにして、同一性の秩序ないし感性的諸対象において実現されることになる諸概念を獲得するのである。

さらに、「現前 (présentation)」と「表象 (représentation)」の区別が、「微分」における経験的対象の発生を説明する (65)。規則として理解された諸微分の関係は、それだけでは「現前」に過ぎない。他方で、想像力によって集められた微分の全体も、それだけでは「現前」に過ぎない。「現象」とは、これらを組み合わせたもの、つまり実現された概念としての「意識的で部分的な総合」と、その概念に応じた仕方でも偶然的なものを表現する「均等に無意識的な全体の総合」の関係である。要は、われわれが外にあると思っている「経験的な像」はすべて、「アприオリな概念に反射した純粋自我の像」であり (66)、つまり「 dy/dx 」として理解された「諸概念」が無意識的な微分の全体に反射され、この「概念」に関わるかぎりにおいて「差異」を伴った「現象」として現れるのである。

このような「微分」の考え方によって「数学的判断」と「物理学的判断」はともに「無限悟性」によって根拠づけられることになる。数学的判断を成り立たせる「規定可能性の原理」は、概念を構成する同質的な微分の関係と、無意識的な全体の総合から選別された微分との関係によって説明される (63)。他方で物理学的判断は、異なる質の諸微分、すなわち異なる概念によって反射された微分のあいだに成り立つことがわかる。この意味で、物理学的判断は、直観の対象に関係づけられているのではなくむしろ、「直観の対象の諸要素」に関係づけられていると言えるのである (63)。前節の最後でみた現象との関係に関する二つの問いも「微分」によって答えられる。「無限悟性」は、「規定可能性の原理」が前提とする「同一性と差異の起源的結

合」の秩序は、「アприオリな概念に反射した純粹自我の像」として無限悟性によって生産され、さらに物理学的判断がなりたつ「差異」の秩序は概念によって反射されたかぎりの「微分」によって生産されるのである。

ゲルーのマイモン論における時間と空間の考え方は、無限悟性によって根拠づけられた「現象」そのものである。まず、マイモンにとって時間と空間とは、「感性的な諸要素のつながり」そのものである(87)。具体的に言い換えるならば、それぞれの人の目の前にあるペットボトル、机、明かりなどといった実現された概念の配置こそが、空間であり、さらに空間における諸事物のそれぞれに対する、過去(ふたが空いていなかったペットボトル)と未来(そのうち空になってしまうだろうペットボトル)そのものが時間である。したがって、実現された概念と、その概念によって照らし出された諸微分のあいだの関係性こそが、時間と空間そのものである。

このときカント的な意味での直観の形式として時間と空間が持っていた能動性は、おのおのの主体からくるのではなく、「微分」の関係として捉えられアприオリな概念によっている。つまり、われわれの意識において、経験の対象が与えられたとき、その経験的对象を構成するのは微分の関係として捉えられた概念の反映である。この反映を構成する概念と無意識的な微分の全体は、どちらも無限悟性が生産した特異的な諸事物に由来するものである。そのため、ゲルーのマイモン論に見いだされる時間と空間の考え方は、人間の外にある自然の秩序が、それ自身の能動性によって、人間にとっての時間ないし空間を形成するものであるとまとめることができるだろう。

4. 結論に代えて：時間と空間の考え方の意義について

本稿では強調しなかったが、結局のところマイモンの試みは失敗したとゲルーは考えている。というのも、結局のところマイモンは、無限悟性と能動性としての時間と空間のあいだの断絶を説明できなかったことで、数学的判断と物理学的判断の根拠づけを諦め、「現象の实在論」を放棄してしまうからである(137)。しかし、他方でマイモンの試みは、フィヒテやシェリング、そしてヘーゲルへと受け継がれていったとゲルーは考えている。これ

らのことからわかるとおり、ゲルーの記述は、哲学者というよりも限りなく哲学史家にとどまろうとするものであるように思われる。しかし、その中にはアカデミズムにおけるカント主義に内在しながらも、それを内側から乗り越えようとする時代の気運の高まりを感じることができるだろう。

マイモン論に読み取られる時間と空間の考え方は、漸進的な人間の理性を想定する点で、フランス現代思想以前の代表的なカント主義者であるレオン・ブランシュヴィックの考え方と共通している。ゲルーがマイモンに見いだす時間と空間において、理性の進展は「規定可能性の原理」の進展によって説明される。微分によって与えられた概念は、規定可能性の原理にしたがって、その概念と親和性の高い諸規定と結びつくことで、その同一性の秩序を拡大することができる(59)。したがって、時間が経つにつれて、現象における同一性の側面が増加し、差異の側面が減少することで、われわれの理性は「無限悟性」へと漸近していくことになる。レオン・ブランシュヴィックもこのような理性の進展を数学や物理学の歴史のうちに見出していた⁽⁴⁾。しかし、このような楽観的な理性観ないし歴史観は、以降の「アヴェンギャルド」の世代において厳しく批判されることになるだろう。

他方で、主体の能動性を主体の外にある絶対運動の次元において説明しようとする時間と空間の考え方は、まさにフランス現代思想における非人間中心主義的な主体の考え方に通じるものである。とりわけ近い立場の哲学者としてメルロ＝ポンティを挙げることができるだろう。例えば『知覚の現象学』(1945)において、カント哲学に対して認識以前の生きられた「世界の一性」が考慮に入れられていない点を指摘するとき(Merleau-ponty 1945:xii)、まさにメルロ＝ポンティは、認識以前の微分の全体性を扱うマイモンの立場に近似していくように思われる。さらに同書で、主体を「時間性」そのものとして理解することで、自己、他者、歴史の関係をとらえようと試みる時(ibid:487)、ハイデガーの影響だけでなく、当時のアカデミズムにおけるこのような時間と空間の考え方を念頭においていた考えることができるように思われる。

さらに、ドイツ観念論に関する哲学的試みを継ぐものとしては、ヘーゲル解釈でよく知られたジャン・イポリットの名前を挙げることができるだろう。ゲルーは、マイモンのうちには、差異をあくまでも無限悟性のうちに認めないという立場と、差異そのものもアプリアリな概念として無限悟性

に含まれると考える二つの立場があるとし、前者をフィヒテと、後者をヘーゲルと結びつける (78-79)。ゲルーが強調する、微分の相互規定からの特異的な諸事物の発生を論じる解釈は、まさしくヘーゲル的な方向性の強調によって成り立つものであり、その意味ではまさしく来るべきヘーゲル解釈を予感させるものであったと言えるだろう。ゲルー自身はそのあと、ヘーゲルの研究に取り組むというよりも、一七世紀合理主義研究へと向かっていくのであるが、イポリットはまさしくゲルーの試みを引き継ぎながら、アカデミズムの内部でヘーゲル研究を行ったことで知られる。そしてこのイポリットが同時にサルトルやメルロ＝ポンティの良き理解者であり、ラカンのセミナーの参加者であり、フーコー、ドゥルーズ、デリダの指導教官であったことも気に留めておく必要があるだろう。

ジル・ドゥルーズが『差異と反復』において、相互規定、規定可能性、微分といったマイモンの差異の哲学のシステムを取り入れながら自身の哲学を展開していたこともよく知られている。しかし、これらの哲学との関係をより明らかにすることは、別の機会としたい。

注

- (1) Gueroult, Martial. 1929. *La philosophie transcendantale de Salomon Maïmon*. Paris : Librairie Félix Alcan. 引用の際は (頁数) の形で表記する。
- (2) 曲線が三本以上の直線からなる場合の証明に関しては省略する。
- (3) 例えば Freudenthal (ed.) (2013) において、現代における「規定可能性」「事実問題と権利問題」「時間と空間」などについてマイモン哲学の理解を見いだすことができる。
- (4) Fedi (2018) の第二十二章、とりわけ p.596 を参照。Fedi によれば、ブランシュヴィックは、ゲルーがマイモン論に見いだしたものと同様の進歩の考え方を抱いていた。

参考文献

Descombes, Vincent. 1979. *Le Même et l'autre : quarante-cinq ans de Philosophie Française*. Paris: Minuit. (デコンブ、ヴァンサン 1983 『知の最前線 現代フランスの哲学』 高橋允昭訳、東京：TBS ブリタニカ。)

- Dosse, François. 2007. *Gilles Deleuze et Félix Guattari : Biographie croisée*. Paris: La Découverte. (ドス、フランソワ 2009 『ドゥルーズとガタリ 交差的評伝』 杉村昌昭訳、東京：河出書房新社。)
- Fedi, Laurent. 2018. *Kant, une passion française 1795-1940*. Hilesheim :Olms-verlag.
- Freudenthal, Gideon (ed.)2013. *Salomon Maimon: rational dogmatist, empirical skeptic: critical assessments*. Vol. 2. Netherlands: Springer Science & Business Media.
- Guerout, Martial. 1929. *La philosophie transcendantale de Salomon Maïmon*. Paris: Librairie félix alcan.
- Merleau-Ponty, Maurice. 1945. *Phénoménologie de la perception*. Paris: Gallimard. (メルロポンティ、モーリス 1967-1974 『知覚の現象学 1、2』 竹内芳郎他訳、東京：みすず書房。)